



『NesT』 Trial / Version
著/痛田三 絵/藤堂桜

たった一夜。たった一夜のうちに、あなたの現実には崩壊した。

／／／

スクランブル交差点の真ん中でじっと空を見上げているシニアがいる。青空があまりにも美しかったから立ち止まった。そんな感じ。シニアは見事に蓄えたあご髭をしごきながら、くるくると表情を変えている。

そんなシニアの姿が気になってしょうがないあなた。

あなたは好奇心に勝てず、シニアに声をかけてしまう。

「なにを見てるんですか？」

すると、シニアは髭をしごいていた手を

柔らかく掲げた。

「雲です。雲を読みました」

たしかに空には綿のような雲がもくもくと浮いている。だけど、〈読む〉というのが分からない。

あなたは首をかしげた。

「雲って一見複雑そうですが、雲のへもと」とはというと、非常にシンプルなんです。そしてそれが外因と交わることで様々な

パリエーションを作り上げる。環境が個性を作るという意味では人間も同様です。つまり雲を読むとは、人間の一代記を読むということなんです」

「はあ……」

あなたはやはり首をかしげたまま雲を指す。

「じゃあ、あの雲も？」

「あれですか？ あれの〈へもと〉は……わたしにそっくりですね」

「へえ、なにが書かれていますか？」

「トラックに敷かれて死ぬ、と書かれています」

——ああ、なるほど、と眩くあなた

すぐさまシニアの手をとると、交差点を一気に渡る。信号は赤から青へと替わり、先ほどまでシニアがいた場所を大型トラックが猛スピードで走り抜けていった。

「命を粗末にしちゃいけない！」

あなたは声を荒げる。

するとシニアの口からくぐもった笑いがもれた。

「どうやって筋書きを破ることは不可能です。セツでもない限りは」

あなたはあきれ果てた。そしてシニアから立ち去ろうと背を向けかけた。

瞬間。

空から大きな〈音〉が降ってきた。あなたはつま先から頭まで、ぐわあしゃんっ！ という音に飲み込まれた。同時に視界をもふさがれる。

それから。

シニアがトラックの下敷となってしまったことに気づくのに、およそ三十秒。

さらにもろもろ合わせて計三分ほど。
あなたはその場で固まっていた。

頭上あたりには高速道路が走っていて、
その側壁の一部が抉られなくなっていた。
シニアの雲はすでに拡散し、消えうせ
ていた。

／／／

あなたは飛び起きる。

息が荒い。心臓がばくばくと音を立て
ている。乱れ散り散りとなった心が、月
明かりに照らされる。あなたはそれをか
き集めながら、今がまだ夜中であること
に思い至った。

しんとした六畳ほどの仏間。ここは父
方の実家であり、家族で訪れる際は決まっ
てこの部屋で雑魚寝をする。

ふと、りん……という鈴の音が障子の
向こうから聞こえた気がして、あなたは
そちらを見やる。

の座り心地をたしかめる。

「うとうととしてたら、電車のベルにびび
らされた」

「そう……」
と、うつむくりグレット。彼女のうなじ
からじわっとした緊張感のようなものが
漂ってくる。

あなたはこれからの逃避行に暗い影を
落としてはならないと、いっそう気丈に
振舞う。

「なあ、それより見てみるよ。いい景色
だぜ」

「そう……」
「ほら、あの建物。変わったデザインして
る」

「ふうん……」
「マジで変なデザインだぜ。多分、黄金
比とか無視ってるよ」

あなたは彼女の気を引くためにわざと
〈黄金比〉という言葉を使う。
でもそれは失敗だった。おもむろに

そこにはシルエットがひとつ、障子紙に
浮かび上がっていた。

あなたは枕元にあった眼鏡をかけると、
それを観察する。

毛羽立った雪だるま。そんな感じのほ
よぼやしたシルエット。だけど、その輪郭
のあいまいさは、繊維的なほつれではな
いように見えた。

あなたはさらに観察を続ける。

雪だるまは、大小様々なひつつき虫が
びっしり規則正しく並べられているよう
にも見える。さらにそのひとつを詳しく
観察してみると、棘の先端は絡み合った
薇デズラのような形をしていて、葉に当たる
部分はまるでドレスを着た少女たちが螺
旋状に延々と手をつないでへかごめかご
めをしてしているようにも見えるけど、そ
の中心にしているのは雪だるまであって、その
輪郭にはやはりひつつき虫やら薇やらへか
ごめかごめをする少女たちがいて、し
かも少女たちにあしらわれたリボンの先

スポーツバッグを叩きつけるリグレット。
バッグは服やマニキュアやビューラーやコ
ンパクトや化粧水や香水や頭痛薬やブー
ツや手帳やライターやタバコやカントリー
マム、それとたくさん巻貝を通路に
ぶちまけた。

あなたは中腰のまま固まっていた。だっ
てこの逃避行の行く先は、フィッシャー邸
だったから。それに〈黄金比〉という言
葉だって、建築士を目指す彼女から教わっ
た。なのに、バッグの中には定規も分度
器も入っていないかった。

あなたは激しく混乱した。ドアの方へ
向かうリグレットを追いかけける足取りも
おぼつかないほどに。

リグレットはドアの前に立つと、目を大
きく見開く。そして「なにあれ」と口の
中で呟いた。

窓の向こう、オフィス街の一面。そこに
ロック鳥の翼が幾重にも重なったかのよう
な奇妙な建物。それは生命活動を終えた

には鈴がついているので、少女たちが一歩
踏み出すのとともに、りん……という音
色を響かせるのだけど、そのポリウムは
雪だるま式に増幅され、ついには地面を
揺るがすほどの轟音となり、あなたは今
しがた見たトラックの夢でも思い出したか
のように絶叫した。

／／／

「うわっ！」

自分の声であなたは目が覚める。

少女が、心配そうにあなたの顔を覗き
込んでいる。彼女はリグレット。中学時代、
あなたとひと月だけ付き合っていた女子。
「肇はせめちゃん、声したけど大丈夫？」と言
う彼女に、あなたはいくらか落ち着きを
とり戻す。

電車は駅から出発しようとして警笛を鳴ら
していた。
あなたは小さく伸びをすると、指定席

ものが徐々に朽ちていくような、ゆっくり
とした時間の中にあった。

リグレットから涙があふれ出した。
あなたはその涙を見極めようとする。

けど、彼女は、ただその場で泣き続け
るだけだった。

／／／

おせっかい君が大声で朝を告げる。

普段のあなたならここでおせっかい君
の頭を叩いて止める。だけど今朝のあな
たは、上半身を起こしたまま微動だにし
ない。おせっかい君も拍子抜けしたのか、
ややポリウムを抑えた。

今、あなたが必要としているのはあと
わずかの惰眠、ではない。だってようやく
と悪夢の王国から解放されたのだから
とはいってもあなたの気分はちっとも晴
れない。直前に見たリグレットの夢。これ
がこたえた。

LIFIGATION

キセン * 643 文字

四方の壁が黒く塗られた狭い部屋で一夜を過ごすことになった。灯りの類はない。ただ部屋の中央に置かれた布団に横たわっていればいいと云う。当然私は眠ろうとしたのだ。しかしこんなときに限って、かつての失言や、ちよっとしたものであるにも関わらず妙に後を引く失敗が次々と思い出され、恥ずかしいやら何やらでまったく眠れない。どうしたものかと思いつ。考えれば考えるほど眼は醒める。少しずつ深みにはまっていくように、ろくでもないことばかりを考えるようになる。なぜか歯止めがきかない。リズムを刻むようにテンポ良く絶望は強まっっていく。絶望という存在それ自体が新たな絶望に変わる、絶望していることに絶望する。もう一秒も絶望していたくない。そのためには死ななければいけない、いますぐ。

彼女の存在は、今でも未解決な問題としてあなたの心の奥底でわだかまっている。普段はそれが浮上することはない。ただ、どあなたの「ムイシキ」という悪戯好きは、気まぐれに夢というマドラーでそれをかき混ぜる。

そんな日は……そう、悲劇の主人公みたいな表情で朝を迎えることになる。

それにしても外はいい天気。

けど彼女の存在がふたたび沈殿するまで、あなたの切れ長の瞳がお天道さまをとらえることはない。

「はああああ……」

朝日があなたのため息を青春色に変える。

Trial Version END.